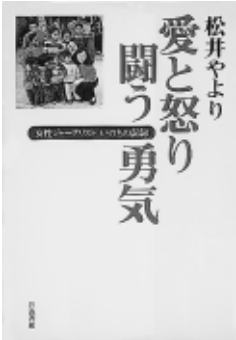
松井やより

『愛と怒り　闘う勇気
—女性ジャーナリスト　いのちの記録』

（2003　岩波書店　258Ｐ　ISBN4-00-022015-2　C0036　1800円＋税）



松本侑壬子

20世紀の後半は、世界的に変化の激しい時代であったが、とりわけ1960年代から90年代末にかけての女性の社会進出は目覚しかった。日本でも、世界的にはまだまだの面やさまざまな矛盾を抱えてはいたが、女性の力は加速的に勢いを増していった。

松井やよりさんは、常にこの激しい時代の変化の波頭に立つジャーナリストであり、同時に抜きん出た女性運動のリーダーでもあった。1961年から94年まで朝日新聞社の記者として活躍した33年間は、日本の女性問題が官民ともにかつてない大きな動きを見せた時代にすっぽりと当てはまる。松井さんは、あくまでも在野にあって国際的視野からの鋭い問題提起とダイナミックな行動力でひときわ輝く存在であり、他の追随を許さなかった。

本書は、2002年12月、68歳で志半ばのまま病魔にたおれた松井さんが、死の4日前まで書き続けたという文字通り渾身の自伝である。類稀な女性ジャーナリストとしての業績もさりながら、松井さんの特徴は前述のように、単に取材し報道するに止まらず自ら社会に向けて波を起こし運動を広げずにはいられなかったことである。これは1人の女性ジャーナリストの回想録ではあるが、また極めて貴重な激動の日本女性運動の記録でもある。少し年下だが同業者として同時代を生きた私の目からも初めて知ることも多く、改めて偉大な女性の素顔の魅力に親近感をもつとともにそのダイナミックな生き方に圧倒される思いである。

松井さんは、1961年に朝日新聞社に唯一の女性記者として入社したその日から、あからさまな女性差別の洗礼を受ける。「女に記者が務まるか」「うちの支局（部）に女はいらない」「非常時の取材ができるのか？」……面と向かって浴びせられるのは屈辱的な言葉ばかりだったが、松井さんはそんな職場の雰囲気にひるむどころか「かえって闘志がわいてきた」。そして以後10年間とった戦略は、「女性ということは表面に出さないで仕事をし、とにかく実績をあげること」だった。そのために「意識的にジェンダー（性差）を隠して、ひたすら仕事に精を出した」のである。

誇り高く意欲も能力もある女性が、女性であるがゆえに職場で排除され阻害された例は枚挙にいとまがない。松井さんのように職場でたった1人の女性でなくとも、男社会の中で極端に少ない女性がそれぞれに孤軍奮闘して疲れ果てるといった話は珍しくなかった。「なぜ、女性同士がもっと手を組んで差別に対抗しないのか」という批判や反省は今ならできる。しかし、松井さんは「男性記者に引けをとらない仕事をして、目に物見せてやる」までは、この差別の日常をばねにして1人で頑張るしかなかった。実際、忙し過ぎて方々の女性と連帯する時間も気持ちのゆとりもなかったであろう。男性とも女性とも連帯しないで、独力でスクープを連打する若い女性記者が、頑張れば頑張るほど周囲からは孤立していったことは想像に難くない。日本型企業社会の典型であるマスメディアでは松井さんは初めから“出る杭”であった。そこからいかにして“出過ぎた杭”としてだれにも叩き潰されることなく縦横無尽にやりたい仕事をやり続ける（と、当時私の目には映っていた）に至ったか。実際には大変な苦労があったようだが、彼女を支えたその鍵は「女たち」と「国際性」であったことが、改めてよく分かる。

入社後、社会部で「お妃記者」（常陸宮＝当時義宮の結婚相手探し担当）からスタート、東京都内の支局、記者クラブを経て1964年の東京オリンピックを担当。このころ、従来女性に門戸を閉ざしていた大手マスコミ各社が一斉に少数ながら女性記者を採用したのは、オリンピックの女子選手村（男子禁制）取材のためであったことは衆知の事実である。松井さんも朝日のオリンピック要員として得意の英・仏語に加えロシア語の特訓もして話題の選手らの取材に走り回る。

しかし、松井さんが本領を発揮し始めるのは、厚生

省クラブ詰め記者として消費者問題、福祉問題などを追い始めてからである。高度経済成長期に入った日本社会の影の部分に光を当てスクープを次々に放ちながら、一方で「マスコミの狭量さ」や公害企業、老人を見捨てる若い世代に怒りと疑問を募らせていった。そして必然のように「ジェンダーを超えた立場で取材しているつもりだったが……知らず知らずのうちに、男性主導の環境破壊的な経済社会システムを問い直すのは女性であることに気づき始めていた」のである。

ついに1970年代の初め、海外取材先のアメリカでピークを迎えていたウーマン・リブに直接触れたのを機に「堂々と女性の視点で書こう」と決心する。「自分の中で根本的な意識革命、思想革命が起こ」り、女性であることに引け目や損だという気持ちが消え、「女性であることを肯定し、むしろ誇りを持てるようになった」からである。それからは、まさに怒涛のフェミニスト・ジャーナリストだ。社内ではすっかり異分子扱いで後輩の女性記者らは男性の上司に「松井やよりのようになってはだめだ」と説教されたというが、それほど男性にとっての脅威だったのだ。女性初の海外特派員として派遣されたシンガポール支局での経験は、とりわけ松井さんにとって意義深いものであった。

松井さんは1994年、60歳で定年を迎えた。先輩女性記者は3人いたが、定年まで働き続けることができた人は松井さんが初めてだった。女性の地位向上や社会進出を報道するマスコミの雄、“天下の朝日”にして、内実はこの有り様である。松井さんは退職に当たり社内報にこんな一文を寄せている。「……迫害する男たちを征伐する夢？を見たことさえありますが、新聞社という日本的企業社会が男たちを非人間化するのだと最近では同情しています。……新聞に書かせてもらえなかった分は十冊著書を出して埋め合わせました」と。

フリーになってからの松井さんはまさに羽が生えたような活躍ぶりである。在職中から主宰していた「アジアの女たちの会」を組織替えして95年に「アジア女性資料センター」を設立、これを拠点に「東アジア女性フォーラム」開催、「北京世界女性会議」のNGOフォーラム参加、機関誌「女たちの21世紀」発行と活動は国際的である。しかし1999年に成立した「男女共同参画法」には国家の女性政策に抵抗してこの言葉を使うことを拒否し続けた。他にも日比混血児支援NGO「JFCネット」、「戦争と女性への暴力」日本ネットワーク（VAWW-NET）の代表も務めている。

本書のハイライトは、こうした活動の集大成ともいうべき「女性国際戦犯法廷」を2000年12月に東京で開き、1年後にオランダのハーグで最終判決を得るくだりである。従軍慰安婦問題は、韓国の女性団体を中心にアジア地域へと広がったが、松井さんは朝日時代にいち早く報道し、いわばそのきっかけをつくった人である。この会議には元“従軍慰安婦”だった8カ国64人もの女性が集まり証言した。戦争の暴力を女性の側から裁く史上初の民衆裁判である。松井さんは「20世紀最後の10年間に女性たちが成し遂げた正義を実現する闘い。それは女性に対する暴力との闘い」であり、とりわけ『慰安婦』は勇気を持って声を上げ、歴史を「前進させた」とする。だからこそとくに若い女性たちに「もっと自信を持って、世の中をよくしていこうと発言し、行動してほしい」とも語りかけている。

こうした目覚しい彼女の活躍ばかりではなく、各章の末尾にさりげなく添えられた友人知人らの人物評が松井さんの人柄をより人間臭いものとして浮き彫りにする。「彼女は散歩しようと訪れた植物園ですら、2時間とはのんびりと過ごせない人でした」（マレーシア人の友人）、「記者の座を100％活用しようとしていた。……いつも一途、周りも後ろも見なかった」（朝日新聞の後輩）、「強烈な意志の力と楽天性」（研究所共同代表）など。とりわけ3つ目の人物評は、偶然にも松井さん自身によるその母親評を連想させる。山手教会の牧師夫人から、子育て後に猛勉強の末牧師の資格を取った明治女の母親について、「甘えられる雰囲気でない母親」であったが「ダイナミックな生き方、前向きな発想、行動力、楽天主義の影響を受けた」と述べている。こうと決めたらわき目も振らずに目的にまい進する姿勢はそっくり、という母娘関係なのである。

松井さんは、このユニークにして力強い自著の最後に「フェミニズムに開眼してから人生が変わった」と述べている。そして「いと小さき者、苦しみ痛む人々への共感、不正や不平等や暴力や差別への怒りに突き動かされて、それらを引き起こしている権力者や体制を問い続けてきた」として、「愛せ！　怒れ！　勇気をもって闘え！」というのが、最後の心の叫びである、と結んでいる。実際、松井さんは本書の中でもよく怒り、憤っている。彼女の怒りは公憤であり、正義の怒りであった。この怒りをいかに行動に移し、社会を変える原動力にしていくか、松井さんが後に続く女性たちに遺した課題は重い。

（まつもと・ゆみこ　十文字学園女子大学教授、元共同通信社記者）